

CMA+PBダブル資格者に聞く、 プライベートバンカー資格

超高齢化社会に突入した日本では、相続や事業承継といった課題に直面する富裕層・企業オーナーも多く、このような課題に取り組むプライベートバンカーの存在は、近年欠かせないものとなっています。

特に事業承継の課題への支援は、税務・法務よりも、証券アナリストの知識や感覚が最も生きる分野と言えるでしょう。事業全体の流れをつかみ、その分析やビジョンの立て方、差別化の方法、上場企業の財務諸表からリスクを読み取る識別眼、アナリストレポートで駆使される会社の意図を投資家に伝えるための表現方法など、証券アナリスト的観点や経験が、企業オーナーへのコンサルティングには欠かせません。

CMAでありかつPB資格を取得された会員の皆様にご登場いただき、受験の経緯やダブル資格の活用、また受験した感想等について、お話を伺います。

1. CMA受験のきっかけ

一瞬の判断がものを言う世界で、理屈は後付けにしか思えなかった

日系の大手証券会社に入社後、そこから20年余に渡る債券の世界に足を踏み入れることになり、債券セールス・国債ディーリングなどを担当、会社はいくつか変わりましたが一貫して金利の世界を走ってきました。

相場は誤解を恐れずに言えば、感覚の世界です。今買うべきか、売るべきか、迷っていたら勝負には勝てません。材料が相場をどちらに動かすのかの一瞬の判断が、その後の結果を大きく左右します。極論を言えば理屈は後付けでしかないように感じていた世界に身を置いていた当時は、正直なところCMAのような理論を修得する必要性を全く感じていませんでした。

また、所属の証券会社ではエコノミスト・アナリスト部隊が多く、優れたレポートを随時出しており、特に自分で独自に市場を分析する余地は小さく、専ら現実の市場における投資家動向の把握に追われる日々を送っていました。

売った買ったの世界から、クレジットを判断して売買する債券投資へ

潮目が変わってきたのは、クレジット市場に注目が集まった1990年代後半からです。北海道拓殖銀行、山一証券など大手金融機関でも経営破綻する時代となり、単に相場の動きで儲けるのではなく、発行体の信用度に応じて上乘せされるスプレッドの厚みが、適切か否かを判断して債券投資を行うことの重要性がクローズアップされる時代になっていきました。

CMAを取得、RMの面白さに気づき始めた法人RM時代

日系・外資系複数の証券会社で働き、ITバブルもはじけた頃、今後の自分の生活に漠とした不安感を覚えるようになってきました。そこで、新入社員の時に一次の経済学だけは合格し、試験を受けることなく再受講だけを繰り返していたCMAを取得することを思い立ち、2003年に取得しました。

2008年から法人RMとなり、大阪、福岡で公共法人等の担当となりました。大阪赴任直後にリーマンショックがあり、ひたすら顧客ケアをしつつ、新たな商売のネタに奔走しました。

入社以来、機関投資家相手の業務しかしてこなかったのも、学校法人・宗教法人等を顧客としての仕事は、ある意味新鮮でした。残念ながら収益面で会社への貢献はできず、会社員としては大変ではありましたが、個人的には、想定していない顧客の反応に出くわす機会も多く、改めて人間を相手にするRMの面白さ、難しさ、怖さ等に気づかされる日々を送ることができました。



住友不動産販売株式会社 法人開発部
海辺 信年 氏
シニアPB

2. 有価証券の世界はごく限られた世界だと気づいた

不動産に興味を持つ

法人RMとして携わった中で、不動産投資スキームのアフターフォローがありました。こうしたスキームの存在に改めて気づかされるとともに、債券などリスクを抑えた投資の一方で、不動産のエクイティ部分というリスク資産への投資を実行している投資家の懐の深さに目を見張りました。

また、不動産分野に触れることで、顧客のポートフォリオの多くの部分は不動産であり、自分が関わってきた有価証券は余資でしか行われぬ、ごく限られた世界であることが見てきた時代でもありました。そんな折に、勤めていた証券会社で早期退職の募集があり、諸々の事情も重なったこともあって、興味が湧き始めていた不動産業界へのキャリアチェンジの機会と捉え、2012年にこれに応募し退職しました。

アセット全体をみる、プライベートバンカー資格に興味

その頃はまだ転職が容易な環境でもなく、まずは不動産鑑定士の勉強を始めました。その年の春に一次をクリアした頃、協会のプライベートバンカー（PB）資格試験が始まることを知りました。

それまで培ってきた有価証券の知識と、勉強している不動産の知識、PBはそうした資産を総合的に扱うプロフェッショナルということで、面白い資格だなと思いました。50歳を過ぎて初めて勉強する楽しさに気づいたこともあり、2013年10月からシニアPBのコンピュータ試験を1単位ずつクリアし、2014年1月で筆記試験の受験資格に必要な3単位が揃いました。

しかし一方で、2年目で合格するはずだった不動産鑑定士二次には落ちてしまい、やや動揺しつつ求人情報をチェックしていると、現在の会社の中途採用の広告が目にとまり、応募してみたところ、縁あって採用していただき、2年ぶりに会社員生活を再開することとなりました。ただ、再就職したことで、時間的制約は大きく、不動産鑑定士の論文試験の準備に絞るか、まずPBの筆記試験にトライした後に短期決戦で準備するか、多少迷いましたが（当時はシニアPBの筆記試験受験資格を獲得してからのデッドラインが短かったため）、折角の機会と思い二兎を追うことにし、結局、両方とも合格することができました。

3. 金融業界の外に出て初めてわかった、アナリスト資格の有用性

CMAの知識が使えるフィールドは思った以上に広い

シニアPBの知識は大変面白いと感じました。個人の相続税を将来の負債と捉えてファミリーのバランスシートで考えるといった、ファミリービジネスの発想は今までの自分にはなかったものでした。

また、CMAの知識も、不動産の世界に入ってから初めて生きてきました。例えば不動産の価格を査定するには、運営主体であるホテルやパチンコ店等のバランスシートを分析して、その事業体の安全性や将来の収益予測を自分で立てなければなりません。また、経済情勢や金融市場の動向も重要なファクターであり、それらを総合的に判断する必要があります。金融界の外に出て初めて、CMAで培った実学としての有効性がわかりました。

CMAで養われる知識は、世の中を総合的に見る上での必要な知識です。「証券アナリスト」というと、株や債券しか関係がないように思われがちですが、名称からのイメージでその効用を限定してほしくないと感じます。実際にその知識が使えるフィールドは、かなり広いと思います。

ファミリービジネスの視点、不動産+金融の融合

これまで日本経済の根幹を支えてきた中小企業では、高齢化で廃業するケースが増えていると言います。しかし日本と同様に人口減少・少子高齢化が進むドイツでは、大都市以外にも発展している地方都市が多くあり、そのカギは家族経営による中小企業の成長力にあるといえます。アナリストが、PBのファミリービジネス的視点を持てば、日本が再び力強い成長を蘇らせるための手助けができるのではないのでしょうか。

不動産と金融は別物の感覚で扱われることが多いですが、実はそうでもなく、不動産には金融工学の切り口など、お互いのフィールドを融合できれば、もっと世界観が変わると思います。微力ながら、今後は自分がその橋渡し役を担えればよいと考えています。